

おんみ しんろく

いぶきちよう

## 恩美新六さん（伊吹町）

今から二百年くらい前の江戸時代も末期にはいる頃のお話である。

当時、京都の伏見と大阪の間を沢山の船が淀川を利用してゆききし、人や荷物を運んでいた。伏見京橋のあたりに、きょう一日の就航を終えた三十石船（米三十石分をのせたぐらいの和船、四・五トン積むぐらい）が船じまいをすませて船をつなぎ、夕食後の一服をしていた。それらの船の中に、伊吹島から出稼ぎにきていた船も四、五隻まじっていた。

その時、陸の方で突然火事がおこり、たちまち、一面、火の海となった。陸では、上を下への大騒動で、逃げまどう人々の群れ、荷物の渦でたいへんな混雑となった。そのうちに、岸につないでいた伊吹の三十石船に、大八車で何台もの家財道具を積みつけて、

「この荷物を大阪の何某の所まで届けてほしい。」

と頼まれた。船頭は、

「よし、引き受けた。」

とさつそく、舫い（船と岸をつないでいたつな）をといて、淀川を、大阪めざして一気に下っていった。

ところが、途中魔がさしたとでもいうか、預かった荷物を大阪におろさずに、そっくりそのまま、伊吹島まで運んでしまった。そして、荷物は、乗組員一同で分配し、そしらぬ顔で過ごしていた。

しかし、悪いことは、いつまでも、かくせるものではない。ついにこの悪事が世間に知れわたって、問題となった。

その時の乗組員仲間の世話人だった恩美新六は、罪を一身に引き受け一同に代わって、刑を受けて果てたといわれている。

乗組員仲間のもとより、島民も、新六の義に感じ手厚く菩提を弔い、更に、「恩美口説」がつくられ、これに合わせて盆踊りも行われて、永くその霊を慰めたということである。

（付記）真浦港内明神社に寛政二年（一七九〇年）建立の常夜灯がある。その世話人三名中の一人に恩美新六の名がある。三好氏ゆかりの人といわれ、墓は泉蔵院内にあり、三十石船関係の人たちが施主として名前が刻まれている。

（「観音寺市誌」より）

